

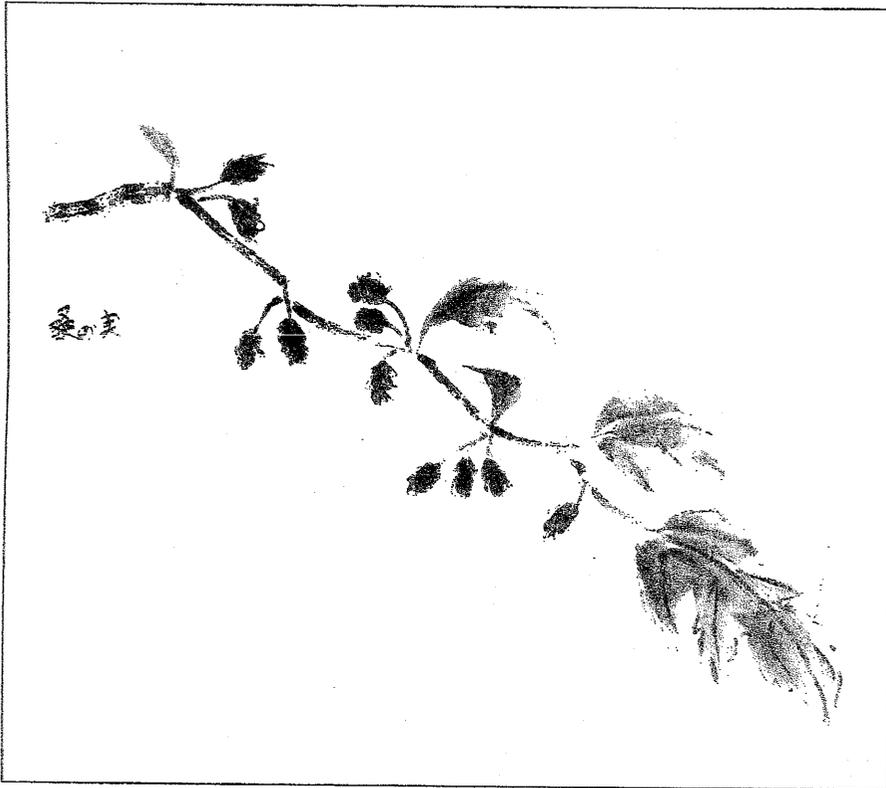
オリーブの樹

第100号

2010年7月18日

شجرة الزيتون

早期釈放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



目次

- P 2 暑中お見舞い 重信房子
- P 3 最高裁判決を受けて 重信房子
- P 6 独居より 6月30日上告趣意書を提出して2年すぎました 重信房子
- P16 重信さんとの交流コーナー 選挙は終わったが 辻邦
- P17 アラブ物語 (12) -PFLPとの矛盾-73年ドバイ闘争の時代 (6)
- P20 六月の歌 重信房子

重信房子さんを支える会

最高裁判決を受けて

2010年7月16日
重信 房子

本日、7月16日、最高裁判所の判決を受けました

1、私は、主文「本件上告を棄却する。当審における未決勾留日数中810日を本刑に算入する。」の判決を受けました。

最高裁判所第2小法廷の竹内裁判長以下4人の裁判官は、2008年1月2日の私の上告申し立てに対して、2010年7月15日「上告を棄却する」の判決を下しました。この判決通告は7月16日に、私のもとに届きました。

私は2000年11月8日逮捕されて以来、ずっと公判を自らの主張と交流の場としながら、今年10年目を迎えました。最高裁判所第2小法廷は、以下の文言によって、この10年間の終止符を打ちました。

上記の者に対する逮捕監禁、殺人未遂、有印私文書偽造、同行使、旅券不実記載、旅券法違反被告事件について、平成19年12月20日東京高等裁判所が言い渡した判決に対し、被告人から上告の申立てがあったので、当裁判所は、次のとおり決定する。

主 文

本件上告を棄却する。
当審における未決勾留日数中810日を本刑に算入する。

理 由

弁護人大谷恭子ほか及び被告人本人の各上告趣意は、憲法違反をいう点を含め、実質は単なる法令違反、事実誤認、量刑不当の主張であって、いずれも刑法405条の上告理由に当たらない。

よって、同法414条、386条1項3号、刑法21条により、裁判官全員一致の意見で、主文のとおり決定する。

平成22年7月15日
最高裁判所第二小法廷

裁判長裁判官	竹	内	行	夫
裁判官	古	田	佑	紀
裁判官	須	藤	正	彦
裁判官	千	葉	勝	美

2、私の公判は反テロキャンペーンの中で行われました。
私の公判は、ちょうど2001年に起きた「9・11事件」の「反テロ」キャンペーンの時代の中で進められてきました。

私の第1回公判は、2001年4月23日にはじまりました。同年の9月11日にニューヨークで無差別攻撃「9・11事件」が発生しています。ブッシュ政権は、この事件を司法にゆだねず、「反テロ」戦争を宣言し、「戦争」としてアフガンへの侵略を開始しました。アフガンからイラクへ、ブッシュ政権は、「9・11事件」を利用して、反米政権の解体をすすめました。その結果、力による支配は不寛容と無秩序と対立を世界大に拡大させてゆきました。資本主義のアメリカの自由さえ「反テロ」の名によって奪われてゆきました。

日本は、自民党小泉政権の下で、無批判に、このブッシュ政権に追随しました。そして、自ら進んで、日本はアメリカの戦略に沿って、イラクへの自衛隊派兵を行いました。さらにその流れによって、自民党は2005

暑中御見舞

申上げます

こちらは「未決」のままに、夏を迎えています。

最高裁判所に上告趣意書を提出してからもう二年になります。そしてまた、逮捕から一〇年目の二〇一〇年です。二〇一〇年はまた、侵略戦争敗北から六五年の節目であり、戦争直後に生まれた私も六五歳の節目になります。参院選も終わり、本物の変革が問われる日本。原爆忌、辺野古など、いろいろのことが仕切りなおしの夏のようにです。

「オリブの樹」も、今一〇〇号を迎えました。二〇〇一年四月に始った私の第一審公判の後から発行されてきたものです。そんなに長い道のりだったという感じはありませんでしたが、区切りの時を感じます。

「オリブの樹」一号から一〇〇号に示されるこれまでの道のりは、なつかしい旧友、新しい友情、家族の愛、また、見知らぬ方々の交流や励ましに支えられてきた道のりでした。逆境とは言え、幸せな時を過ごしてきました。支え、励ましてくださったすべての方々から感謝します。

この支えと励ましはまた、共に、現在を変えようと願う交流や絆も育ててくれました。

私も正念場の夏を迎えて、どんな時、どんな条件にあっても、みんなの絆と力と共に進もうと思っています。感謝と決意を込めて、皆様の健康な夏をお祈りします。ではまた。

重信



オリーブの樹 第100号

年には、憲法改悪案まで発表しました。「9・11事件」以降の「反テロ」キャンペーンは、また、この公判のつづいた9年間の日本の空気と環境も変えていきました。検察当局は、公判で、また、論告求刑でそれを利用し、重刑を作りあげていきました。

検察は、私の逮捕後、国家の威信と面子をかけて、70年代に「超法規的措置」を2度も強いた日本赤軍に、巧妙な報復的政治弾圧を仕掛けていきました。

長年、日本赤軍のリーダーだった私を重刑にしなければ示しがつかないといきまいて、検察は躍起になっていました。「重信は一生獄から出すなど言われている」と、検察上層の意向と圧力を現場検察官が私ばかりか検察側証人にも何度も語っています。私が関与を認め謝罪している旅券の不正使用事件では、重刑を科すことはできません。そこで、当該警察官が立件しても有罪は難しいとさえ言っていた「ハーグ事件」を手がかりに無期重刑を企てました。

「ハーグ事件」は、1974年9月13日に行われたPFLPの作戦です。PFLPの欧州の現場責任者の指揮に沿って、日本人の実行部隊がオランダのハーグにあるフランス大使館を占拠した事件です。PFLPはこの作戦によって、フランスに拘留されていた当時PFLPのボランティア兵士の日本人の釈放を求めました。

この当時、私たちは、まだPFLPの指揮下で闘っており、日本赤軍という独立した組織は結成されていませんでした。それらは、かつて裁判所が一度も使用してこなかった不定義な「テロ」なる用語を論告に放って、判決文に用いたことにも表れています。

しかし、検察は、70年代の「不確かな供述調書」を利用し、さらに、私の逮捕の後から新たな供述調書を作成して、証拠を作り上げました。この70年代の「不確かな供述書」も、また、私を国際手配する目的で作られたものです。

証拠にもとづいて逮捕起訴するのではなく、検察の図にあわせて、弱い立場に居る者を脅かして、証拠の供述書を作り上げるのです。

これは、昔から今に至る警察、検察の常套手段です。後述するように、検察は30年以上前のパレスチナ解放闘争の戦闘行為を現在の「無差別テロ」と意図的に同一視、結びつけて危機を煽って、裁判官に訴えていました。検察官はテロ組織のリーダーだから、やった筈だと当該事件の事実と何の関係もないエピソードや断片を「状況証拠」として並べ立て、無期懲役を求刑しました。

それに対して、第一審法廷は、結審間近に交代した裁判長の下で、事実を踏み込んだ検証は行いませんでした。事実を精査すれば、70年代の供述書の誤りや矛盾ははっきりしています。しかし、裁判長は、供述書の断片を論拠とした検察の「やったに違いない」の筋書きにおもね、有罪判決を下しました。

これまで、丸岡さんの公判でも、和光さんの公判でも、判決文の中で、決して使用してこなかった、法になじまない政治用語である「テロ」という語まで検察の論告に倣って、初めて使用しました。そこに、これまでの裁判所の画然とした立場を裏切る裁判官の姿勢が示されていました。

しかも、ハーグ事件の実行行為者であることを認め、その上で、殺意を否定して争っていた和光公判でも、西川公判でも、私の事件への共謀は否定して判決されています。二つのハーグ事件法廷では、私は無罪の判決を受けているのです。

私の法廷の裁判長は、仔細に調べてもどう共謀したか不明と断りつつ、有罪としてしまいました。しかし、さすがに検察求刑の無期懲役とはしえず、懲役20年という重刑判決としました。2006年2月23日のことです。

以来、控訴審、上告審とハーグ事件無罪主張を中心に争ってきました。検察も無期求刑をさらに求めて控訴していました。しかし、控訴審では、門前払いの如く内容に立ち入らず、双方の控訴を棄却してしまいました。そして、今回、最高裁判所は「上告を棄却する」と判決しました。

3、司法改革と共に

現在の日本の司法は、「疑わしきは罰せず」「推定無罪」「疑わしきは被告人の利益に」という世界の人権基準にはまったく立ち遅れたままです。反対に、「疑わしきは有罪」がずっと基準の如くです。「疑わしい」被告を無罪とするのではなく、有罪判決を下すことによって、検察と裁判所が一体となって、起訴有罪率99%以上を誇っています。

政権交代を経て、司法改革が求められながら、未だ検察による「正義」の独占下にあります。訴追権を独占し、起訴有罪率99%以上という現実、日本の司法が検察の独裁下にあることを示しています。昨年明らかになった「足利事件」の冤罪問題も、免訴に抗して実質無罪判決を長い闘いの末に勝ち取った「横浜事件」も、こうした立ち遅れた司法に風穴を開けました。大きな事件に限らず、こうした冤罪や事実と合わない判決は、今もくり返されているのです。厚生労働省の村木元局長の公判でも、検察の物語に合わせて、冤罪が作られている様子を示しています。このように起訴されたら、公正な裁判は期待できません。「推定有罪」によって、証拠開示も公判も進みません。裁きは、裁判官よりも検察官の裁量によって決定されています。

ことに、公安事件や政治犯に対しては、私のみならず、他の被告に対しても、偏見と先入観による不当な判決が科されています。国家に楯突いたこうした被告には、公式な裁きはなされず、不当に罪を最大化した重刑が科され、さらに仮釈放も認めようとしません。連合赤軍事件などの無期懲役の受刑者たちは、すでに38年を超えて獄に繋がれています。無期刑は、刑法に反して、終身刑のごとく緩やかな死刑として運用されています。この国では、「犯罪被害者」も被告も、また受刑者も、人権が無視されたままです。

こうした「オールマイティ」の検察の厳罰化の中で、世論も事件も作られています。「日本赤軍はあれだけのことをしたのだから、リーダーだったらやられて当然」というマスコミと検察の足並みを揃えた風潮は、国民に一方的な物語を信じさせてしまいます。社会も、そうした一方的な流れを鵜呑みにせざるを得ません。冤罪を訴える正当な訴えも、人々にはなかなか届きません。

国家や国際社会に異議申し立てをした者だからと言って、権力の恣意による世論操作や不当な重刑が許されて良いはずはありません。冤罪・国策捜査・不当な裁判・重刑判決に対して権利をしっかりと訴えることによって、一方的政治弾圧を正していかなければならないと思っています。このことによって、国際的に見てひどい立ち遅れにある、日本における「犯罪」被害者、被告、受刑者すべての人権状況を一步でも克服・改善していきたいからです。

日本赤軍は、長い活動の中で、不十分な闘いや過ちや失敗を犯しています。また、私の逮捕によって、共にあるべき方々に多くの有形無形の被害を与えてしまいました。にもかかわらず、逮捕以来多くの方々の支え・励ましの中で、この10年近い公判を闘うことができました。

皆様の友情や励ましは、いつも私が多くの人々と共に闘っていることを実感させ、勇気も力もくれました。だからこそ、また、振り返る私や私たちのパレスチナ解放闘争と連帯し闘ってきた日々を誇りとして語る事ができました。

謝罪と共に、心からの感謝を伝えます。

今、わたしは最高裁判決によって刑が確定し、これから皆さんと断絶された環境へと旅立ちを強いられます。けれども、これまでの闘いの誇りと皆さんとの友情と連帯の絆を抱きしめて共に進みます。そして、また必ず新しい変革の道を皆さんと共に、さらに進みます。

まだ最後の「異議申し立て」を続けるつもりですが、これまでの支援・協力に感謝し、判決をここにお知らせします。

(編集室註：見出しなどを「判決」としましたが、最高裁の通告書には「判決」ではなく、「決定」とあります)

6月30日上告趣意書を提出して2年すぎました

6月1日 地図帳をたどりて怒りのパレスチナ
ガザの海から虐殺の報

衣更えの6月に入りました。4月の寒さから解き放たれた5月は良い日和がつつき、その分晴れやかな6月を迎えています。今日も晴天。衣更えで、刑務官のユニフォームも半袖です。

5月30日のリッダ闘争38周年を迎えたと思ったら、昨日にはガザへの封鎖に対する人道支援の船に、とうとうイスラエル軍が襲い掛かり銃弾を浴びせて10人以上が殺されたというニュース。今日の朝日新聞の一面に出ています。ハマスが選挙で政権に就いて以降、イスラエルはパレスチナ住民への集団報復としてガザを封鎖してきました。アメリカもまた国際社会にパレスチナへの経済封鎖を強いて、ハマス政権潰しを共演してきました。

それに対して、当時から対抗して世界各地の人民が連帯し、支援し、ガザの封鎖解除を求めてきました。求めるだけではなく、海上から、陸路から、人道物資を2008年からずっと支援してきました。正月にも、海上やエジプト側からの封鎖を解きつつ、イスラエル、エジプト政府の妨害を撥ね退けて、人道物資を送りつけてきました。日本ではあまり報道されてきませんでしたが、こうした支援は、国際社会、ことに欧州ではいつも大きなニュースでした。

今回も、船団には、トルコやヨーロッパなどの人権活動家や国会議員ら700人が6隻の船に乗っていましたが、公海上でイスラエルの拿捕銃撃が行われたとのこと。イスラエルのやりたい放題がずっとつづいています。「イスラエル建国」以前からのアメリカの「同盟」のために、どんなパレスチナへの占領も虐殺も許されてきました。核武装から暗殺・民族浄化まで、改めるところか、ネタニヤフ政権になって、ますますひどくなっています。米国政府が、ユダヤロビーに権力基盤を左右されるためにイスラエルを見捨てるはずがないと高をくくっています。世界秩序が公正でないことを証してあまりある歴史と現実が「パレスチナ問題」「イスラエル問題」なのです。

重信 房子

「ガザ封鎖解除」こそイスラエルへの制裁と共に、国際社会が立ち上がるべきなのに。政府に抗議しつつ、人民連帯は、こうした人道支援を繰り返しつつあります。今回のイスラエル軍による虐殺は、人道支援を恐れさせ、止めさせるところか、かえって、パレスチナ人民への連帯を育て、ガザ封鎖解除の声を育てるに違いありません。

昨日の面会に訪れた友人たちは、5月29日の東アの逮捕から35周年集会にも、また5月30日のリッダ闘争記念集会にも参加してきたとのこと。東ア35周年は元オウムのアレフの荒木広報部長も加わったパネルディスカッションで、150人ほどが集まって行われたそうです。逮捕死刑攻撃の中で、どのような弾圧を受け、活動を行ってきたのか、『反日』と『オウム』から死刑を考える」というテーマで、真剣な討議がとてよかったとのこと。その中でも、丸岡さんの病状を報告し、刑の執行停止やカンパなどが呼びかけられていたとのこと。

また、5・30集会では、40人ほど、若松・足立さん中心の飲み会であつたらしい。リッダ戦士たちが「葬式ではなく、祭りを！」と遺言したことに基づいて飲みながらの放談パーティだったらしい。日本赤軍批判など、いいたいことを言い合つと、呼びかけがあつたとか。小異を置いて、大同について進もうという方向に話が進んだとか。放談と親睦から、地道な一歩に繋がったのだろうか……。

また、5月30日、社民党は連立政権離脱を決めました。「日米共同声明」で、普天間飛行場の移転問題が、自民党時代の原案に近い辺野古と明記され、「最低でも県外」も反故にされました。この閣議決定に反対した福島大臣を罷免したことで、逆に「罷免は党の否定と同じ」と、連立離脱を社民党は強いられ、決定しました。

甘い判断とは言え、鳩山首相の「最低でも県外」という発言から、米軍基地問題はより全国民の知るところとなりました。それはとても有意義なことで、その意味でまじめに取り組もうとしたはじめての首相と言

えるでしょう。でも、重要なことは、このことで日本の国家権力を牛耳っているのは内閣ではなく、米国と米国シンパの日本の官僚たちだというのがよくわかりました。外務・防衛・検察官僚は、日米同盟を揺るがせにする政治を許さないシフトをしいて、「政治と金」の問題で、揺さぶってきました。「最低でも県外」や、「駐留亡き安保」や、「日米安保不要論」をとこなる勢力を骨抜きにするか、政権から追放することに躍起になっていました。

そして鳩山首相を抱き込んで、日米同盟機軸のこれまでの体制に決着させたわけです。社民党を政権から追い出すことも視野に入っていたはず。三党合意政権で社民党の歯止めがなくなれば、アメリカに主権を牛耳られた状態がつづいてしまうでしょう。

新しい政権は、アメリカに日米同盟に口出しさせんとサインを送りつつ、自民党並みの不況対策を口実に「国内の民主的改革」のみに狭められてしまう危険があります。米国政府は、米戦略に逆らわない限り、あとは日本の政治に口出しすることはないでしょう。米国にとって、むしろ自民党よりも一定の情報公開など統治方法としては、民主党が好ましいとも言えるでしょう。

鳩山発言や3党連立はせつかく日米安保を問うきつかけだったので……。でも、社民党の反対の意志は沖縄の意志ですから、これから逆に鳩山政権はうまく進む道が閉ざされたようなものです。

すでに、これでは参議院選は聞えないと、首相退陣論も出ているとか。「辺野古移転」は、沖縄の意志のみならず、国民の基地反対撤去の意志として止めさせる方法を考えたいものです。

そんな政局の新聞を見ていたら、大谷弁護士の面会。久しぶりです。面会室に入ったとたん驚かされてしまいました。「どうしたの？ 痩せた？」「そんなことないけど、そうですか？」「目の下の隈どうしたの？！」と。これは私も不本意なのですが、抗癌剤のシスプラチンを使い始めてから、副作用の色素沈殿で、どつとシミや肌が黒く変色して痣のように顔にも広がっています。それが「隈」となって、面相を変えてしまっているようです。まだ脱毛はないのですが、やはりもう1年以上も抗癌剤をつづけて来て、疲れやすいです、とか。そんな病気のことなどを話しました。

医者からは、6月にはまた内視鏡で胃と腸の検査を行うと言われていたところ。どうしても腫瘍マー

カー数値が下がらず、また、転移もまだ見つからずの状態ですので、担当医もよく対応を検討してくれています。明日はまた、シスプラチンの5時間半～6時間にわたる点滴治療の日です。

夕方、急ぐ返事の必要な手紙が届きました。明日の朝から点滴治療が始まり、ちょうど投函の締め切りの3時ごろに点滴が終わるため、手紙などは書く時間が取れません。それで、明日の準備と投函の手紙の支度などをして、夜更けまで作業に集中していました。そんな作業をすると、身体は逆に快調になります。変なのですけど。

今日は友人から藤色の胡蝶蘭とカスミ草。ありがとうございます。

6月2日 点滴の五時間半が始まりぬ

命知らずに過ぎし日思いつ

晴天の日差しが房の隅に届いています。今日も晴天。点呼を経て、朝食までの間に、点滴のための準備。今日、提出するものや投函するものについて、朝食後すぐに願箋(申請用紙)をもらって書き込み。ことに、他の友人の上告審の補充書面を作成したのですが、それに署名捺印の上、指印証明をもらってほしいとそちらの弁護士から依頼されていて、その手続。指印証明を受けたら、それも今日中に投函。ちょうど3時の投函締め切りまで点滴がかかるので、早朝やっておかないと間に合いません。

投函用の手紙類の点検がまだ終わらないうちに、もう8時半で呼び出し。点滴が早く始まれば、投函前に房に戻るかもしれない。早く始まるのはありがたい。書類、日誌、レポート用紙、筆記用具、読む本、ポットにカップ、タオル、ちり紙などを持って移動。

すぐにベッドに横になって血圧を測ったら、148と80。体温は35.6度。「少し血圧が高いのは、今走ってきたからでしょう」と言われました。すぐに、500mlのラクテックGの点滴。その後、吐き気止めの入った100mlの生理食塩水。その後の第3パックに、抗癌剤のシスプラチンが入った500mlの生理食塩水の点滴です。

はじめの500mlのパックに11時頃までかかり、それから第2パックで、12時前頃まで、第3パックが2時10分過ぎくらいまでの時間となりました。点滴中の昼食も普通に食欲があつたし、第3パックの時には、冷やした枕(アイスノン、雪枕)を使って、ス

オリーブの樹 第100号

ムーズに進みました。早くはじめてので、3時前に終わりました。

少し頭が重いくらいです。でも、抗癌剤点滴のあとには、必ず体が火照り、体温が上がります。点滴後の体温は、37.3度。血圧は124に70で正常値でした。

点滴中に、「指印証明は今日は審査中で戻ってこない。どうするか?」と担当刑務官が聞くので、点滴が終わってから、その旨至急手紙を書くことにしていました。慌てて2時半頃房に戻り、それらの急ぎの連絡をバタバタやっていたら、もう3時です。

アイスノンがあるので、頭を冷やそうと横になっていました。抗癌剤がヒートするので、頭髮に作用して脱毛が起こると本に書いてあったので、冷やすのはいいだろうと横になったまま。夕方、冷し枕を取り替えてくれたので、そのまま冷たい枕をして、まず体を休めることにしました。やはり、1年以上の抗癌剤治療のせい、この頃は体力消耗で少し疲れやすい。抗癌剤を使いはじめたのは、去年の手術後から9月までの半年間以上、UFTとユーゼルという抗癌剤でした。結局、腫瘍マーカー数値が下がらず、第2段として、薬をTS-1に変えて、今年2月まで経口投与。それも第3クール目から効かなくなり、第3段として、TS-1とシスプラチン点滴にグレードアップしています。どれもはじめは腫瘍マーカーは下がるのですが、第3クール目くらいから耐性ができるのか効き目がなくなって、元に戻ってしまっています。シスプラチンの前までは体力に影響を感じませんでした。ところがこの点滴治療に入ってから少し疲れます。それに副作用。色素沈殿と涙目がひどくなったこと、食事すると胸、胃腸焼けで辛い日があります。

夕方、休みながら聞いていたラジオから、鳩山、小沢ダブル辞任のニュースが流れてきました。民主党沖繩、社民党などが野党に加わって、鳩山不信任にまわれれば、参議院で可決されるのを防ぎたいし、またこのままでは参院選は聞えない。大義を失っているという圧力があつたのでしょうか。

それに対して鳩山首相が、民主党の転換の置き土産として、小沢さんもと辞任を果たしたように思えます。鳩山さんがちゃぶ台をひっくり返すのは、国家権力を牛耳っている「日米マフィア」に対してではなく、米国に距離を置こうとする勢力への意趣返しのような辞任です。「抑止力」という口実でアメリカの要求を受け

入れてからの鳩山路線は魅力を失いました。社民党を切り捨て、「東アジア」を基礎にせず、米韓日で「北朝鮮対策」を急ぐなど、なだれを打ってアメリカ迎合路線……。何があつたのだろう。日米マフィア包囲網にはまってしまうようです。

6月3日 野鳩呼ぶ屋根上見れば光の中

種こぼれ出で緑萌えおり

今日から2週間の休業。経口抗癌剤TS-1は、3週間飲んで、2週間休業のタームです。それでもシスプラチンを投与したばかりなので、走りすぎないように運動場でゆっくりと歩いたりしました。遠くに見える小さい空き地のよもぎや姫女苑がもう夏草のように丈を伸ばしています。夏の気配です。プランターはアジサイの苗が2本ずつ植えられていますが、今のところ花茎は出てきていません。

房に戻って、メディカルレポートや手紙など投函の準備。たくさんの資料などが届きました。5月10日分からあります。この頃、「パンフ扱い」となる資料、入力したもの、ピラなどは10日以上も、ひどい時には20日かかるので、こちらの計画が大いに狂っています。

午後には、病気見舞いのピンクのバラの大きな花、ありがとうございます。

3時前に主任(女性の最高位)が着て、「指印証明は不許可です。『今回はこの件について指印証明を行わない』と決定されたので、投函締め切りに間に合うようお知らせにきました」と言うのでびっくり。不許可になるなんてありえず、自動的に指印証明されると思っていたので、「なぜですか?理由を知りたい」と言うと、「理由は伝えられていない」との返事。

返送された友人の公判のために書いた最高裁提出用書類に署名、指印して、結局、当局の指印証明のないまま手紙を添えて、あわてて弁護士に送ることにしました。弁護士には、「指印証明は理由もなく不許可とされました。刑務官らの話では、新法ができてから印鑑が持てるようになったので、指印証明はしていないよだというのです。私も明日理由の釈明を求めますが、急ぐなら、弁護士から当局に指印証明を求めてください。私のみならず、他の人々のためにも」と走り書きを添えました。

今日の新聞では、前に第一審無罪だった「中核派のロケット弾事件」逆転有罪となったとの記事。これは、

まったくの政治裁判です。87年の起訴から22年以上経過し、04年には全員無罪になっていたものです。高裁で06年有罪にすべく、差し戻されたものです。新聞によると、裁判長は「被告側の不当な訴訟活動が審理を長期化させた」と、述べたとのこと。ひどい。もちろん3人は即日控訴しましたが。

6月4日

この頃晴天つづきが嬉しい。朝起床前に、目が覚めると、ルーバーの隙間に陽が輝いていて、それだけで気持ちが明るくなります。もうそろそろ副作用が出て悪心が始まるので、運動も食事も気をつけています。今日の朝食は鯨の角煮。どうも「研究」名目で捕ってきて売りさばっているのか、去年くらいから朝食に時々鯨の角煮が出てきます。朝願い事に昨日の指印証明について、これまでの経過を記した上で、第1に、いつから指印証明が不許可になったのか?第2に、不許可とした理由は何か?第3に、弁護士本人から直接当局にその必要性を提出した場合は、指印証明してくれるか?そして、第4に、どうしたら指印証明とれるか教えてほしい、と4点の質問を書いて提出しました。

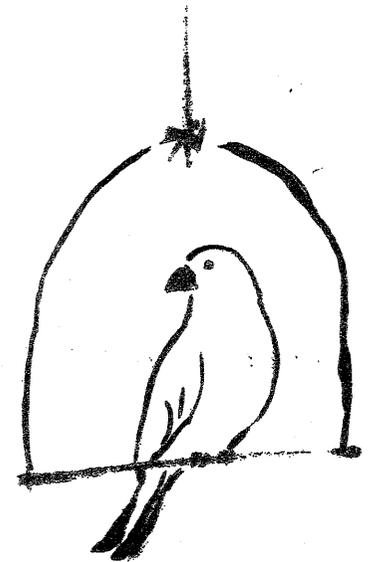
体調があまりよくありません。朝のうちに白血球チェックの採血をしました。

政局は、民主党菅代表選出。反小沢非小沢の声に乗って、日米同盟堅持、アメリカに逆らわず、沖繩しわ寄せの方向にシフトしそうです。民主党の中では、国家主義的ながら、相対的に小沢路線が他の親日米同盟勢力より、戦略絵がしっかりあつたと思います。小沢路線の「国連中心主義」もその「深遠」にアメリカとの距離のとり方を目ざしていたと思われま。

もちろん、米国は国連の対等な一国一票の総会の権限強化を嫌い、「国連中心主義」は許せません。アメリカは一貫して常任理事国パワー強化の国連改革を求め、国連を大国のものとしようとして来ました。

米ソ冷戦後も、米国は国連の決定権を総会の方に権限をもたせようとする非同盟諸国と対立してきました。小沢路線の「国連中心主義」には、日本の「自立」の意味が強くなるはず。そして、東ア共同体も含めて、国権を中心とする図ながら、新しい日本の平和的な集団安全保障が考えられていたでしょう。

その分、「三党合意」として、つまり社民党が政権に居ることは「対米抑止力」として、小沢路線には有意



義だつたはず。それらは、また、米国の側から見れば、つぶすべき戦略論であつたでしょう。「政治と金」の検察、マスコミの焦点化も、こうした脈絡の中に位置していたと思います。

菅代表は、リセットして、米国とことを構えずに安定基盤を育てようとするでしょう。また、菅代表に象徴される全共闘世代の合意形成して動くやり方は、トップダウンの自民党派閥政治時代の文化の小沢路線の欠陥を補ってうまく進めるかもしれません。

少なくとも、非小沢で、民主党の選挙対策は進みそうです。

6月6日 真夜の月赤みを帯びて中天に

獄窓見下ろし語る如くに

陽の強そうな晴天。手紙の返事を書いたり、荷物整理をと思いつつ、体調が整わないので、休憩。

4日には、菅新首相が衆参両院の本会議で第94代首相に指名され、仙石由人を官房長官に決めて、8日の組閣に向けて動き出した様子です。

身体を休めつつ、小嵐九郎歌集「明日も迷い鳥」を読みました。先日面会に来た明大の旧友も小嵐ファンだと知りました。ちょうど今日の新聞の朝日歌壇の「風信」にも、この歌集の紹介記事が出ていました。「第3歌集。収録の長歌〈犬生き挽歌〉が痛切。作者は全共闘世代。新左翼運動の活動家だった歌人の内面を映す」とあります。

この歌人小嵐九郎は、尊敬していた社青同解放派

オーブの樹 第100号

リーダーの中原一氏を「内ゲバ」で失っています。また、その激闘と葛藤の中で、小嵐さん自身逮捕・受刑の中から歌人となり、作家となったという人です。

歌には、「内ゲバ」を真正面に据えて、悔いと慟哭の原点を決してごまかさぬ怒りと悲しみの強さが詠まれていて、同世代人として胸に響きます。

書記長の屍の靴に口づけむ

遺産数える無駄してまれんこぶ

なんのため歌うたうのと訊かれたら

一氏の音だ脳挫傷死の

ものがたりものがたりだよそのむかし

犬死にに惚れた青年たちの

あの時代の生きた青年たちを犬死にというなら、俺は犬生きたんだと凝視し、深く時代と同志への鎮魂と己への怒りで詠っています。

またこの歌集の中に「死海の北へ」という2000年に詠んだ一連の歌があります。

死海よりやはうえとあら一の違いゆえ

血溜まり増やし神という薬

伸びをする公三の眸に刻は降る

あじあは見まい東の果ての

深爪をする度おもう公三が

歌わぬわけを桜さくらと

ちちははへお礼のいいようありませんと

剛士は遺すてるあびぶへと

いうならばあらぶの風は乾きいて

にっぽんは房子梅雨こそが性

など、日本赤軍の仲間を詠んでいる歌もあります。勝ち目のない闘いを闘う者への慈しみがのぞきます。

自己を詠った歌もあります。

犬死にをうたいし歌人はなお生きて

指を折りたり十指で止まり

沢枯梗のむらさき淡くそれだから

自棄酒に似る殺しの宣言

さいならと水かさずきで碧出て

ガソリン匂うコップを翳す

パーボンを生のまま注がれ裂れけり

内ゲバの七日半前

きみの眸に映らぬ闇のさくらばな

時を刻んでときを失くして

どの歌も私にも共通の情景がひろがって、時々悲しい。

夜、2時過ぎか、珍しく赤い三日月がじっと独房を見

つめているように光っています。久しぶり。ずっと月を探しても探せなかったのです。天候のせいと獄窓の向こうのルーバーのすき間を月がわたる30分のめぐり合わせが悪かったせいです。

じっと月を見つめつつ、歌集「明日も迷い鳥」の「ものがたりものがたりだよ〜犬死に惚れた青年たちの」を声に出してみました。少し涙。

6月7日 同病を相憐れむだよと旧友来たる

思いの丈を語りしひと時

今日は新聞の休刊日。数日の副作用を経て、体調はほぼ普通に返っていますが、涙目はひどく上まぶたも厚ぼったくかぶさる感じのまま。肌は顔や腕にあちこちシミが広がって、やっぱり見苦しくないかと気になります。

朝に採血、白血球のチェックらしい。

9時過ぎに友人の面会。今、癌の治療中の旧友Aさん。久しぶりです。Aさんも癌の骨への転移があって、体調はすぐれないと手紙で知っていたけど、若々しくスポーツマンのように颯爽と表れました。

「あら?!とつても元気そう。良くなってみたいね」。お互いに、病状の話をして、「副作用で肌がシミや黒くなって……」などと言うと、「そんな歳だよ、当たり前だよ」と笑われてしまいました。それから、現在の政治・政局について語りつつ、左翼は現実の政治過程にコミットできるように考えを改めないなどと、ちょっと話してもう12分。いろいろ話しは尽きないのですが、「元気だね!」と、別れました。彼の元気に励まされています。でも、本当はもっと辛いのかも知れないです。

それからすぐに入浴の順番。髪はまだ抜けないなど、シャンプーをつけて指でそろそろ髪を洗いつつ思いました。

そして、房に戻ったとたんに、運動への呼び出し。あわてて、運動房へ。暑い日です。午後には29度を超えたとか。グラデーションの赤いバラが届きました。

夕方に、公判用の準備書面などの、待っていた入力稿がやっと届いて、また、他の作業用の文書も届きました。校正作業を急がないと。

昨日の新聞には、入閣の顔ぶれが大体こうなると出ていました。「最小不幸社会」を目ざすと表明し、外交、安全保障は自民党時代のままに、国内の統治体制の改革を目ざすようです。「官から民」へと再編するために、

小沢・鳩山路線から変更して、内閣と党を一体化させていくようです。

6月6日の新聞では、菅新首相に期待が59%、投票先が民主33%、自民17%という朝日新聞の世論調査が出ていました。まさに、マスコミが書いては世論調査と称してマッチポンプで、政局を作るような日本の政治は異様です。「みんなの党」ネーミングもいいけど、マスコミ好みなのか第3極などとさかんに持ち上げて社民党に対する批判否定とは大違いです。

また、パレスチナでは5日に、パレスチナ自治区やガザに向けて、支援航行中の「レイチェル・ユリー号」にイスラエル軍が乗り込んで拿捕したようです。レイチェル・ユリーは若い米国人女性。イスラエルの暴圧に抗して、戦車の前に立って止めようとしたレイチェルを、イスラエル軍がそのまま戦車で押しつぶし虐殺したことはあまりに有名です。レイチェルの両親もまた立ち上がりました。イスラエル軍は、パレスチナに公正を求めるアメリカ人もお構いなしの暴虐・弾圧です。

先月も大学の講演にイスラエルを訪れた、ユダヤ系米国人のノーム・チョムスキーを追い返し、入国許可していません。もっともチョムスキーはアンマンからネット中継で講義を行い、恥をかいているのは、料簡の狭いイスラエル政府ですけれど。

6月8日 面会の君の笑顔は10・8の

自信に満ちた時代に重なる

朝から曇り空。今日は青天井の運動日なのに。東拘視察委員会の提言でやっと実現した月2回の青天井の運動房です。何しろ東拘は、前にイラン人が脱走したことで、新舎の設計を厳重にしたらしく、細かい格子やコンクリートで固めていて、運動房すら陽も当たらず、薄暗い独房です。それが視察委の提言で「長期拘留者の人」だけ月に2回天井がコンクリートでなく、金網のところで陽に当たって運動できることになったのです。そして今年4月から、2回のうち1回は大きい雑居房サイズの運動場を独り占めできることになりました。今日は大きい方で、走れる日。それでも陽のない曇り空。

そう思っていたら、先に面会。大学時代の旧友。一緒に詩集を出していた文学仲間です。公判の傍聴にも来てくれて、文通もしていたのですが、再会は40年ぶり。会ったとたんに、40年を飛び越えてしまいま

す。話し方、声、昔のままです。学生時代の恋人とすぐ結婚した決断も早かったし、ツイギーのように細くて、ボーイッシュだった彼女。富岡妙子ばりの詩を書いて、もう一人の仲間と3人の同人誌集「一揆」を出してました。67年の10・8闘争で、私はもう詩を書かないぞと決めてから、詩集は出さなくなりましたが、あの頃の話して、うわー!と夢中な一瞬です。すぐ時間がたってしまいました。今はフェミニンな穏やかな母親らしい感じですが、彼女の話し方に耳になつかしい昔がよみがえります。ありがとう!一瞬の幻のようです。

戻ってすぐ青天井へ。広い運動房に出ると、70センチくらいにひよろひよろと伸びた金魚草がプランターの中で、あちこち風に倒れています。アジサイのプランターもいつもの運動房は陽が当たらないけど、こちらの苗は花をつけそうです。

それに係りの人たちがどんぐりの実を植えて育てていたのは撤去されていたのですが、こっちにプランターごと持ってきてくれていました。やっとな芽が出たのに撤去された!と怒っていたけど、こちらの陽あたりのところで植えた葉の葉らしいのが、3本ももうちゃんと大きな葉を2枚ずつもつけて伸びています。いいなあ!金魚草の茎を直したり、あちこち見て回って、それから1000歩走ったら。大いに疲れました。畳を6枚並べた程のいつもの運動房では、ダッシュもすぐぶつかるので、ほとんど抜き足差し足程度の走り方でした。ここでは15メートルくらいを走り回ったら、ちゃんと勢いつけて走れるし、大汗をかいて疲れてしまいました。でも、気分爽快です。

新聞では、今日菅内閣の発足です。参院選対策の新内閣と言われていますが、もともとこの菅さんは「市民運動出身」と言われながら「方法」はそれでも、内容はかなり「現実保守」的です。この人は個人的野心の人ですから、自分の長期安定政権を画策するでしょう。

サンダーソニアとカーネーションが届きました。ありがとう!

6月11日 スリガラスの向こうに広がる夏見つめ

心は飛びぬがザの虐殺

先日質問した指印証明の件で、昨日区長に呼ばれました。4月から変わった新しい区長で、官僚的な前の区長より話しを聞きそうな感じの方です。初対面なが

オリーブの樹 第100号

ら上からの回答の伝達です。第1に、いつから不許可か？は「不許可」ではなく、案件によって処理しているとのこと。第2に、不許可とした理由は？は、「必要がないから。」第3に、弁護人から東拘に要請したら指印証明可能か？については、「仮定の問題には答えられない。」第4に、どうしたら指印証明が可能か教えてほしいについて、「教えられない」との回答です。あいかわらずの上からの官僚答弁。でも、伝達した区長は私も初会見なので、挨拶をしました。病気の方はどうですか？と気遣いを見せてくれました。

今日、昼に看護師が16日(水)に、胃と腸の内視鏡検査をやると知らせにきました。去年の内視鏡検査からもう一年なので、再検査をしましょうと前に診察の際、ドクターに言われていました。6月14日から15日まで、絶食で、水と茶と栄養ドリンクの「ラコール」を飲むこと。食事は16日の夜からなること。15日の夜からは水分も一切なしで、下剤を飲みます。さらに16日の午前中に2リットルの下剤を飲みます。これは浸透圧を利用して、胃や腸で吸収させずに消化管を洗浄するので、この2リットルの下剤が不可欠です。でもこれが難問。いつも胃がひっくり返ったように受け付けず吐いてしまうためです。吐いたら役に立たないので、どうやって吐かずに飲めるか……。これが、毎回腸の検査の時の悩みの種です。

とにかく、今日から消化の悪いものはとらないことにしました。配膳の野菜、きのこ、海産物などは食べず、ジュース、パン、ご飯、缶詰だけにしました。そ

うすれば、腸の洗浄も楽なので。

イスタンブールで7日からはじまった「トルコアラブフォーラム」(アジア、中東20カ国のアジア信頼醸成措置会議《CICA》)で、イスラエル非難の共同声明を昨日出しています。イスラエルの拿捕虐殺事件を非難しました。トルコはこの間、中東和平やイスラエル・アメリカによる反イランの緊張に対しても、政府レベルでもNGOのレベルでも存在感を示してきました。EUの尻尾にくっつくよりもイスラム世界のイニシアチブの中で、ロシア、EU、中東、コーカサスにわたる地政学的な要の役割を果たそうとしているようです。

エルドアン首相は、EUへの参加は望んでいるが、誰もトルコの隣人との関係に口出しすることはできないと宣言しています。この経済フォーラムは2007年に創設され、トルコとアラブ諸国の経済発展を目ざしてきたものです。

ことに、これまでのアメリカ、トルコ、イスラエルの戦略同盟を組んできたトルコ軍と対立を避けつつ、そうした中で政治家たちは再配置を目ざしています。国境地帯のクルド対策もあって、シリアとも共同軍事訓練や中東の反イスラエル戦線も組んで進めています。

前イスラエル政権とシリアのゴラン高原返還をめぐるシリア・イスラエルの秘密交渉を仲介してきたのもトルコでした。

レバノンハリリ首相もこのフォーラムに出席して、中東はイスラエルの犯罪的野蛮な振る舞いに晒されていると訴え、拿捕虐殺事件を国際調査団による調査のみならず、イスラエルの謝罪を求めるべきだと息巻いています。

この会合で、トルコ、シリア、ヨルダン、レバノンは自由貿易協定を実現する協議会を作り、域内の物流や人の自由な動きを作り出すと決定したとのこと。そして他の国にも参加を呼びかけました。

エルドアン首相は、今後も国民の高い支持のもとでアラブ諸国と同盟していく中で、EUに対しても存在感を持ちつつけていくでしょう。「世俗主義」の名で、これまで親米、親イスラエルの同盟あった軍部はどんな動きに出るでしょう。「世俗主義」の憲法違反として、憲法裁判所から政党解散などの妨害のあった過去の教訓を生かし、エルドアン首相らはどこまで進められるでしょうか。

6月14日 梅雨入りに無限の時間を迎いつつ はやぶさ帰る青き地球に

今日は梅雨入り。週末12日の新聞では、菅首相の所信表明演説が載っていました。「強い経済、強い財政、強い社会保障」の実現に向けて、決意表明したとのこと。魅力のないお題目です。日米関係を重視し、普天間基地は自民党案・鳩山案を受け継いで、沖縄の負担軽減を目ざすとのこと。また、今国会で、郵政改革法案の成立を見送ったことで、国民新党代表の亀井郵政改革担当相は辞任し、自見氏に変わったなど、民主党が「建て直し」の名で、選挙シフトに転換したことで、政局が選挙に向けて動き出しています。菅内閣は、当面の力関係故か、それとも本音が出たのか日米関係は米要求に沿って進め、日米安保重視の路線です。

また、「強い経済」の方向で、税制抜本改革着手を表現しています。選挙で、保守、自民党支持層を今後の長期的な支持勢力として取り込もうとしているようです。今日の世論調査では、投票先民主43%、自民14%とのこと。マスコミのムードのマッチポンプで、またも世論が左右されているようです。

今日のニュースは何よりもはやぶさ帰還のニュースが魅力的です。宇宙開発の是非はともかく、7年もの間、60億キロの旅から地球にたどり着いた技術と生命力に国民が喝采を送りたくなるのも判ります。

夜はカメルーン戦です。サッカーも楽しい。海外に居ると、やはりスポーツの花はサッカーです。私はユーゴスラビアを昔は応援していました。「レッドスター」と「パルチザン」という国内チームのネーミングも良かったし、オシム監督、ストイコビッチが活躍していた時代です。

今日は私は内視鏡検査に向けた絶食のはじまり。それでも「ラコール」を飲み、お茶を飲むので、空腹は感じません。

今日の新聞に「ユダヤ人の起源—歴史はどのように創造されたか」を出版したシュロモー・サンドのことが出ていました。「ユダヤ人とは誰なのか？」という問いは鋭いものです。イスラエルを建国した人々の大多数は、パレスチナ(カナン)から追放されたユダヤ人ではなく、ハザールなど改宗したユダヤ人だと述べています。当時のユダヤ人の多くは、パレスチナ人となったという見解らしい。

ユダヤ人は宗教であって、民族ではない、建国神話はシオニストの偽作など、もともとPLOのみならず

各地の進歩的歴史家や研究者も言ってきたことです。それをイスラエルのテルアビブ大教授が書き、聖書時代から現在までのタブーに踏み込んで述べている点で、大センセーションをイスラエルにもたらしているベストセラーとのこと。

これは、写真月刊誌DAYSの6周年記念号でも詳しく紹介されていました。イスラエルは国際法に違反した政策で、国際社会から疑問視され、国内ではシオニズムの一方的神話に疑問が提出される事態の中で、ネタニヤフ政権は、パレスチナ民族浄化による排外主義で、乗り切れると愚かにも考えているようです。

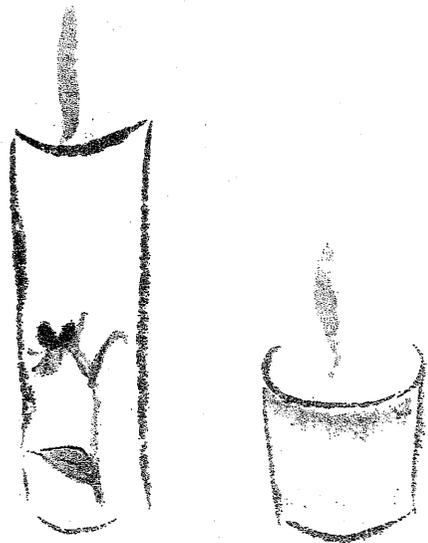
午後には、大学時代の旧友が来てくれました。いつも来てくれて、励ましてくれています。小嵐文学のファンなので、彼の「歌集『明日も迷い鳥』いいよ」というと、「買って読むよ！」と盛り上がりました。

6月15日 雨多き6・15の晴天の まばゆい青もまた哀しかりけり

珍しく晴天の6・15の日。樺美智子さん追悼。今日は面会に失敗しました。山本さんが「来たら来る」と前に言っていたのですが、山本さんの友人と同姓同名の人が面会とのこと。山本さんと入れ替わったのかと、不確定ながら断るわけにも行かず面会室へ。まったく知らない人でした。その人には申し訳ないけど、「予約のシステムなんです」と説明し、「山本さんが来たら申し訳ないので、来ないように連絡してほしい」と頼んで、山本さんの連絡先を伝えたりとバタバタ。夕方に、今日はメイが来る予定の手紙が届いて、申し訳ないことになりました。

夕方には、絶食がつづいたので空腹になってきました。夜下剤を飲んで、明日の準備。明日は朝から手紙を書いたりできないので、夜中に準備しています。

また、ちょうど友人が「検察との闘い」(三井環著—元大阪高検公安部長)「創出版」を送ってくれたので、読みました。三井さんは検察の裏金を告発したことで、それをちょうどテレビで本人が語る直前に口封じ逮捕された人です。何の罪でもないことを罪につくられて、1年以上にわたって受刑を余儀なくされ、2010年1月に満期出所しました。自分の体験した恣意的な権力の濫用に怒り、獄にいたときから、権力の告発、司法に関する改革提言を行っていた人です。友人たちと前からこの司法に関する提案に注目し、満期出所後は「政治犯の弾圧に反対する会」の2月の集会にも参加



オリーブの樹 第100号

してもらい、交流していました。この点は「オリーブの樹」96号に書いています。

この本には、権力は自己保身のために何でもやるという実体が具体的に示されています。しかも、日本国民誰にでも、やろうと思えば、例外なく引っ掛けて犯罪者に仕立て上げることができることを、三井さんの事情は示しています。

どんな罪でも作れることを、オウムの別件逮捕の時にも実感しました。そのひどさ、「権力なら何でもできる」「ああいう人はやられても構わない」といった、マスコミの権力の提灯持ちの風潮に呆れたものでした。私たちのような「社会的異端者」のみならず、三井さんのような内部の改革者にも圧殺の暴力をふるうとは……。法を犯している者が保身のために法を護ろうとする者を犯罪者に仕立て上げていく姿が、三井さんの体験として示されている本です。

検察庁の常習犯罪である「裏金作り」を告発した結果、微罪ではありえない「実刑判決」です。国策捜査の検察と一体となった裁判所の力のない姿を見ます。「国策捜査」は、権力の意志でなんとしてでも「犯罪者」に仕立て上げて、社会的に封殺することです。左翼に対してずっと使われてきたやり方です。鈴木宗男氏らに対しても、外務省の保身の時もそうです。

しかも、三井さんに対する進行中の仮釈放手続を検察は妨害して、結局「満期出所」となりました。出所の朝に、三井さんも権力の陰謀に危険を感じつつ、友人たちに迎いを頼んだそうです。

多くの人の迎いに喜び、決してこれからも黙っていない、告発をつづけるという三井さんの意志からこの本ははじまります。そして、2章で、裏金告発。3章で獄中での闘いを記しています。そして、4章「提言」として小沢民主党幹事長に対する権力の恣意的な捜査も告発し、最後の5章では、2月26日「創」編集長主催の「シンポジウム『小沢VS検察』と報道のあり方」を再録しています。ここには、満期出所して間もない三井さんと鈴木宗男氏、安田好弘弁護士（小沢秘書の石川議員の弁護士）、上杉隆氏、青木理氏、元木昌彦元「週刊現代」編集長らが語っている様子が記録されています。

これまで一方的に検察権力の「正義」を伝えるままの大手マスコミによって、権力告発の声はなかなか社会に届きませんでした。しかし、権力の側にいた人たちからの権力の腐敗と保身の実態の暴露と告発と改革

を求めることがはじまっています。「情報公開」の鳩山新政権の中から、そうしたあり方も市民権を得つつあります。こうした声こそ社会の公正を育てていくし、力になる一冊と言えます。

6月16日 内視鏡めぐるモニター見つめつつ

我が体内の地雷をさがす

朝から雨。8時過ぎに看護師がでんと2リットルの下剤を持ってきました。「1時間以内に半分の1リットルは飲むこと。あとは少しずつゆっくりでも構わないから」と言われました。「吐かないように少しゆっくりになるかもしれない。全部飲めないかもしれないけど」と伝えました。前も8割くらい飲んだのでOKだったし。

午前中に何とか洗浄。昼休み中に浣腸などを終えて、13時からこちらの準備はOK。お腹がすいてきて、検査から戻ったらオレンジを食べたいな……などと考えているので、体調はいいようです。

13時半から、まず胃の内視鏡検査。終わってすぐに、大腸の内視鏡検査まで。

終わってほっとして、房に戻ると「面会！」とのこと。検査と重なったので、キャンセルにしてもらったはずなのですが、ちょうどタイミングよく終了したところなので、少しふらふらしつつ、面会室へ。なつかしい昔々の女性の友人です。赤軍派時代の話。「若い！昔よりおしゃれで美しくなった！」などと友人に話しつつ、昔話や娘たちのことを話していたら10分。またね！嬉しい再会でした。

友人と楽しく話したせいで、元気も出て、野菜ジュースを飲んでいたら、診察の呼び出し。よかった！すべてタイミングよくて。3時半過ぎ、診察室には担当医と医務部長たちが待っていて、まず先ほどの検査結果を示してくれました。「胃は少し荒れてるところあるけど異常なしです」と。そして、大腸は「ほら」とさっき撮った写真と去年同じところを撮った写真と並べて、二つ比べながら説明してくれました。「ポリープが去年あったところ、なくなっていますよ。良性の形だったので、様子を見ていたのです」とのこと。「えー！そんなこともあるのですね。じゃあ摘出処置も不要です」と、嬉しいことでした。

「あと、血液検査の腫瘍マーカーは、CEAは2.1。1で前の26.2より下がりました。ところが他のマーカーCA19-9の方は112.4と上がりました。

前は59.6ですから。ちょっと上昇です。でも、CEAが下がっているの、良いでしょう」とのことです。CA19-9の上昇の根拠は不明ですが、ドクターに「その根拠を先生も研究・検討してください」と、お願いしました。

そして、涙目がひどいので、眼科診察をアレンジしてほしいと依頼しました。ヘモグロビンやコレステロールや中性脂肪などは正常値とのことでした。

「体調はどうですか？」と言うので、「今、もう、お腹がすいていますから、大丈夫です」と答えると、笑っていました。そして明日から第4クール（シスプラチンTS-1治療）をつづけることを確認しました。

房に戻って、梅干やお茶を飲んだり、夕食はパンと鯖の水煮缶詰を開けて、オレンジとシンプルな味でおいしかったです。

6月30日

今日は、2008年6月30日に、上告趣意書を提出してから、2年目です。もう「夏を迎える前には判決」と、思いつつ、2年目を迎えました。いつ判決文が届いてもおかしくないのですけれど。

この間、6月23日に、「オリーブの樹」が届き、もう99号だったと改めて思います。この10年みんなの支えの中で公判に臨んでくれたこと、改めて感謝しています。

また、6月の内視鏡検査の後には、6月18日、民主党も公約を発表し、消費税10%の菅首相の話が焦点化されたり、24日には参院選に突入しました。

また、6月29日の新聞には、第一審で、事実誤認の私への判決をした村上博信裁判長が心不全で亡くなったこと、彼がハーグ事件の私の裁判を担当したと出ていました。

パレスチナでは、ガザ封鎖について赤十字国際委員会が「集団的懲罰にあたり、人道法違反」として、ガザ封鎖解除を求めています。また、国連のパレスチナ難民救済事業（UNRWA）の事務局長もガザの全面開放を訴えています。

パレスチナは、イスラエルの存在自体が問われれば問われるほど、イスラエル政府はパレスチナ人の民族浄化を進め、レバノン、シリア、イランに戦争挑発をしようと目論むでしょう。イスラエルにも米国にもそれを準備する勢力がうごめいていて危険です。

逮捕から10年目、私の公判は9・11以降の反テ

ロの時代の中で、進んできました。公正に裁かれず、現在の重刑に至っています。9・11からはじまったブッシュ政権の戦争政策の帰結は、今でもアフガン、イラク、パレスチナの住民の困難に示される如く明らかです。加えて、失政はアメリカ発の経済危機共々、国際社会の不安定さを増大させたままです。

また、日本でも自民党政治の帰結として、アメリカ頼りのもと、借金と官僚天国の密室政治のつけを国民が今支払わされる構造に直面しています。「情報公開」で、権力のでたらめな構造が少し判ったのは良かったとして、さらに変革へと進めたいものです。そのためには、今の「現実路線」の名で、消費税を上げたり、「日米合意」の名で、辺野古への基地移転をすすめる限り、「最小不幸社会」を望む政治とかけ離れていくと思います。沖縄は不幸でよしということでしょうか？国民に対する「最小不幸社会」になるのでは？！

「強い経済、強い財政、強い社会保障」というレトリックは、あやしいと思いませんか。私も最後かも知れない不在者投票の登録をしたところです。変革のつづきを投票にも直接行動にも育てたい！

昨夜のパラグアイ戦はいい勝負だったようです。惜敗というよりも、でき過ぎではないかと思えますけど。

7月11日 追記

夜、9時の就寝で、ラジオが切れました。8時からの即日開票、出口調査で、民主党が50議席に届かないか？などとコメンテーターが話しているところでラジオはお終いです。

うつろいやすい日本のファッションのような政治。菅首相は非小沢の安定政権を固める野心で、逆に墓穴を掘ったようです。消費税10%など、マニフェストも国民も置き去りにして、米国や企業と共に立った気分になっていったのでしょうか。

今回の選挙は、小選挙区制がいかに民意を損ない、多様な意志を踏みにじっていくかを示すでしょう。小選挙区制をやめて、中選挙区比例制で、より正確に国民の声を育てる改革こそ必要です。民主党のマニフェストの改革案はそれに逆行しています。

民主党は三党合意の抑止のないまま、「現実路線保守」へと、ますます身動き取れない政治になっていくのでしょうか。民主党の魅力は、情報公開にありました。そこから再び変革を育てるのは、やはり国民の運動と意志の力でしょう。変革をさらに。

選挙は終わったが

辻 邦

■茶番の垂れ流し

ようやく参院選が終了した。例によってマスメディアは、笑劇まがいの候補者張り付き番組（私が見た某民放TVでは、民主党比例代表候補の女性柔道家や、自民党比例代表候補で元ツパリ女優を取り上げ、「彼女たちはこんなにがんばっているんです」式の提灯番組を流していた）を放映したり、特定の政党や候補者の宣伝とも取れるような特集を組んだり、いい加減うんざりであった。

鳩山前総理を辞任に追い込んだ沖縄問題について、マスメディアの大半は黙殺し、もっぱら消費税問題を大きく取り上げ、意図的にそれを争点に据えるように仕向けた。その結果、民主党は改選時議席から10議席減となって、手痛い敗北を喫した。一方、自民党は選挙区を中心に14議席増となったものの、民意を正確に反映する比例区では伸び悩んだ。改選前の1議席から11議席へと躍進したみんなの党だけが、メディアで持ち上げられていた。一方で、共産党と社民党は、いずれも改選議席を維持することが出来なかった。完敗である。

■創り出される民意

選挙終了後のマスメディアによる検証の多くが、管・民主党政権の不安定化を指摘している。国民新党との連立だけでは、与党は参院の過半数に及ばないからだ。今後の連立政権の形、政権に参加する政党の組み合わせ等について、議論が噴出しているが、そうした中で多くのメディアの注目を集めているのが、躍進したみんなの党だ。

みんなの党は当面、消費税の税率について見直さないことを主張しており、増税ありきの民主党や自民党とは一線を画している。しかし、彼らの政策の根幹は、小泉純一郎と竹中平蔵の主導した新自由主義である。小泉政権が進めてきた新自由主義路線の下で、日本の国民生活の基盤が大きく損なわれ、貧富の差が拡大し、階級社会・格差社会が出現したことを考えれば、みんなの党の政策を容認することは出来ない。だが、悲しいかな、大衆の多くがそこまで注意を払うことはまれだ。

大衆がメディアの報道を鵜呑みにし、簡単にその影響に左右される傾向があることは、政治学の研究から立証済みである。ユリウス・カエサルという言葉ではないが、人間は誰でも目にした全てが見えているわけではない。多くの人間は、自分が見たいと欲することしか目に入らないものなのだ。こうしたことを前提に考えるならば、果たして民意がどこまで「民意」たり得るのか、それが本当に有権者の主体的意思の表現であるのか、実は相当疑わしい。言い換えるなら、みんなの党とは、マスメディアに踊らされた大衆の非主体性が生み出した「バブル」ではないだろうか。

■大連立への懸念

バブル新党・たちがれ日本の共同代表のひとりである与謝野馨は、14日のテレビ朝日の番組の中で、「民主党と自民党が政策調整をして連立を組むことが一番いい」と語った。おそらくこれは本音だろう。与謝野自身もはや自民党を離党しており、高齢でもあり、いまさら自民復党を画策しているわけではないだろう。だが、いまでも彼が自民党に強いシンパシーを感じていることは間違いなし、党内にそれなりの影響力を持っていることも否定できないだろう。それらを念頭に置けば、現在の自民党内に渦巻く民・自大連立政権への期待を与謝野が代弁したと考えるのは、それ程見当違いではあるまい。

それを踏まえた上で、民・自両党大連立政権が出来たと仮定すると、かなり恐ろしいことになりそうだ。もともと民主党は、自民党内の権力闘争に敗れた人々と、政権の旨みにありつこうと欲した旧社会党右派の野合によって誕生した政党であり、結党当初から胡散臭い側面を持っていたことは否定出来ない。民・自による連立政権の成立は、両党の体質から考えるなら、翼賛政治出現の引き金となる可能性が高い。翼賛政治が誕生すれば、特殊な場合を除いて、圧倒的多数与党が少数野党に配慮し、その意見に耳を貸すことがまれになるのは必定だ。

そして、翼賛政治の果てに待ち構えているものが独裁であることは、歴史の語るところである。

アラブ物語(12)

PFLPとの矛盾—73年ドバイ闘争の時代(6)

重信 房子

14. 来訪者たち

足立さんは送還され、庄司先生も帰国された後、残った私たちと欧州から来ていた仲間は話し合いをつづけた。在欧の仲間たちもアラブ赤軍として共に闘う気味である。彼らは、また、PFLPのボランティア共同もつづけていきたいが、アラブ赤軍として自立した闘いを進めるべきだという。

すでにこの頃には、何人もの日本人ボランティア志願の若者たちが、PLO、PFLPに来るようになっていた。欧州をまわって来た、元全共闘の人、自転写旅行で立ち寄った人、いろいろの人がいた。グリラ志願のYさんが日本からPFLPの軍事ボランティアを希望して参加してきたのも、その頃だった。PFLPの意向を受けて、EさんらがYさんと話し合っていた。PFLPの側は、パーシム奥平たちへの強い信頼と、ニザール丸岡の活動の中から新しい参加希望者をアウトサイドワークに受け入れる体制が作られていた。しかし、ちょうど、ニザール丸岡自身がアウトサイドワークの仕事で不在だった。ドバイ闘争直後で、私たち非軍事的な部署に居た者たちはまだアウトサイドワークとの共同自身を十分検証する視点に欠けていた。

今、ドバイ闘争でアウトサイドワークのやり方に疑問を持ちつつも実情を知らない私には彼らへの幻想もあった。ニザールは批判しつつも、やはりアブ・ハニへの信頼も一方で強く抱いていた。そうしたことを知っていたので、ドバイ闘争のやり方に不信感を抱きつつ、ペイルートの日本人ボランティアもYさん受け入れに協力していた。まだ、リビアに行って、ドバイ作戦の実情を把握する前である。

そんな折、Yさんはアウトサイドワークに加わった。ニザール丸岡がペイルートに居たら、彼の判断と指揮の上で、そうしなかったかも知れない。また、ニザールの統率のもとで、分担ができただろうが、彼はちょうど不在だった。こうして、Yさんはパレスチナ解放の闘いへとスムーズに入るようになった。

Yさんは、自分がパーシムたち同様パレスチナでいかに闘うかを考えていた。日本では、Yさんの友人たちは革共同系の仲間だったという。Yさんは、一時は

熱中して読んだマルクスの経哲草稿や革共同理論が馬鹿らしくなって、実践あるのみと、踏ん切りをつけてきたらしい。地区の労組で知り合った人脈の紹介によってPFLPに来た。彼は日本革命よりも自分の生き様として、一介のコマンドになりたいという。これは、アウトサイドワークには歓迎された。

もともとスポーツ選手だったので、体力もあり運動が得意のようで、武器の扱い携行にすぐ慣れた。Yさんは、パレスチナ人気質の陽気さも気に入って、すぐにパレスチナの友人に溶け込んでいる。私たちがリビア大使館などの交渉に行く時などは、PFLPの指示で同行することもあった。PFLPはリビアと対立していたので、PFLPの人は同行がふさわしくないためである。

当時はリビアの革命記念日にEさんと足立さんが行くことを考えていたが、足立さんは強制送還されてしまった。

そこで、バグダッドの方にちょうど技術者の友人Sさんが来ることになっていたので、欧州のHか、日本からの技術者Sにリビア行きを同行してもらおうということになった。結局リビア側との大使館での話し合いで、ドバイ実行部隊釈放問題優先ということで、Eさんと技術者Sさんが、革命記念日に向けて出発した。予定していた革命記念日より少し遅れたかもしれない。

その頃Rさんが来た。彼は欧州から北アフリカを経て、ペイルートに着いた。そして、PFLPの事務所にボランティア参加を打診してきたうちの一人だった。

Dさんはちょうど不在だった。Eさんもリビアに行っていた。ペイルートにはBさんと在欧のHさんと私が出た。そこに、Rさんの受け入れについて協力してほしい、彼の意図や希望を確認したいからと、PFLP保安部から知らせがきた。こういう時には、非公然任務のアウトサイドワークやそれにすでに属しているYさんなどは登場しない。逆に、合法的分野のPFLPボランティアの人が頼まれる。

在欧のHさんは、自分は作戦に行く兵士や新しい人とこれまで顔を合わせないようにしてきた。在欧の活動上も会うのは困るという。

BさんはRさんが書いた経歴がプントの関係者ということで、自分は左翼経験がないので、話ができないという。仕方がないと私が会うことになった。

そして、Rさんと会い、プントだと言うので、共通の知人の名もあがり、すぐ信頼感が生まれた。敵ではないし闘う意志がある。PFLPでも、アラブ赤軍でも、闘う条件があれば闘いたいという意向だと知った。訓練は、できるならしたいという。それなら、訓練がある時まで、アラブか欧州どちらかで待つように言うと、じゃあ欧州に戻って待機すると言う。隣の部屋にいたHさんから、それなら、ベルリンの局留めを連絡場所にしよう。こちらの在欧の仲間が必要なら、彼と共同や連絡もするからということで、Rさんは欧州で待機してもらうことになった。ここでは省略するが、この頃、私たちは他に何人も日本から来た若者とPFLPの間をつないで活動した。こうして、パレスチナのためにボランティア参加した日本の若者たちは、当地で出会い、私たちと違った領域の活動をする人も居た。公安の標的とされず、それぞれの活動を終えて帰国していった人も何人もいる。

私はベイルートでドバイ闘争対策をしながら、在欧の仲間と今後の独立組織に向けた検討をした後で、バグダッドに戻った。9月中旬くらいだったろうか。

15. 再びバグダッドへ

73年9月中旬、打ち合わせを終えると、私はバグダッドに戻った。パキスタン、クウェートの貿易、イラクでの技術者会議に、ちょうど友人たちがバグダッドに来ることになっていた。

イラクやクウェートには、ANMの商人やパレスチナ人の商人も多い。バグダッドでは、目抜き通りにANMの友人がレストランをはじめることになった。在欧の仲間は店のインテリアや味付けまでアドバイス

して協力している。ビルの上の階には日本の商社やジェットロも入っていて、日本語の新聞も入手できたので、こちらにも都合が良かった。イラクでは、空港の荷物検査で、「裸の女性」のグラビアの日本の週刊誌は没収される。PFLPの友人が空港に入国者を迎えに行った折に、時々廃棄処分の週刊誌を持ってくるし、日本語の情報はそんな風にも入ってくる。

バグダッドに戻ると、少しの間にメイは見違えるほど大きくなってた。ベイルートに向かう時、まだメイは5ヵ月だったが、母乳で育てるのは私の条件では難しいと、その機会に哺乳瓶の授乳に切り替えていた。また、いつ出かけるか分からない。皆の愛情を受けて育ってくれれば良いし、私が居られる時にはできるだけ一緒に居たいし、居てあげたい。そんな思いが強くなった。

母になることは、自分の肉体的生命のサイクルで考えていた「革命」を、歴史の時間軸に逆に自分を相対化して位置付けるようになるものだった。自分のサイクルをはるかに超える子の時間を考えるので、革命の考え方も自分がどうするかより、革命に自分の小さな存在を位置付けることになるようだ。

バグダッドでは、中流あたりのバース党の幹部なども住む一角の一軒家が私たちの住居だった。当時は、PFLPの兄弟組織、ヨルダン人民党の党首家族と一緒に住んでいた。この党首の家族の女性は私が日本からアラブに来て以来の仲良しのPFLPの女性リーダーのうちの一人であった。ヨルダン内戦でも、大活躍した人だ。また、この家族の女性の一人は、リッダ闘争後志願してハイファへ決死作戦に参加し、キプロスに向かった。キプロスからハイファへと船で出発することになっていたという。ところが乗船の前日、キプロス公安当局者がホテルに来た。何をやるか分かっているのに、何も問わないから作戦を止めてベイルートに戻ってほしいと当局者に言われてしまったという。結局、決死作戦は見破られて送り返されてしまった。そんな経験を持つつわものであった。

イラク政府が政治亡命のように保護を決め、はじめに、私たちに提供してくれた家は大きすぎた。金持ちから接収したらしい古いどっしりした家で、住みやすかった。使用人や掃除の人が来るのも気に合わない。私たちにそんなのは不都合だ。妊娠中だった。掃除、洗濯、生活は自分でできると断った。ただし大きすぎて、掃除も大変だった。それで、ヨルダン人民党の党

首のこじんまりした家に、引越したのだった。党首家族は73年イラククーデター後まで、私たちと一緒に住んでいた。私がメイを連れてベイルートから戻った時に、クーデターの時の様々な弾圧や混乱を語って教えてくれた。そして、ドバイ闘争後、私がメイを預けてベイルートに出かけ、9月に戻ってすぐ、一家はバグダッドを離れてしまった。

バグダッドに戻った9月、PFLPから、日本人がベイルートから来ていると告げられた。Wさんだった。強制送還された足立さんが送ってきたということらしい。足立さんからWさんを送るという事前の話はなかった。そんな話以前に、彼は突然拉致されるように送還されてしまったのだった。

足立さんは、ベイルートで打ち合わせの途中で、強制送還された。結局、日本では逮捕されたわけでもなく、そのまま帰国して活動していると、Wさんは言う。その話しは、私もPLOからその前後の頃に聞いた。日本に強制送還される足立さんに付き添ったレバノン治安当局の者は、足立さんは結局一般乗客のように、釈放されてしまったのにはびっくりしたという。自分の国の法律で捕まえられるので、外国で捕まえてもらい送り返せるとはひどい。民主主義の否定だとPLOの人に話しをしていたらしい。実際、足立さんはすでに若松さんと日本でリビア対策と資金作りの企画を考えていると、そんな話をWさんから聞いた。それに上映隊の実情や日本の運動の状況など語ってもらった。また、当時の中東の状況について私も語った。

足立さんとしては、自分が出張すべきリビアに行く前に送還されてしまったので、Wさんを送ってき来て、アラブ赤軍を支えようとしたのだった。情報センターの活動なども考えたり、こちらの皆がやってくれるように足立さんがアラブに来たらやるような「何でも屋」の一人として送ってきたのだろう。

Wさんの話の中に、足立さんの伝言の急ぐ企画があった。財源確保に本を出す企画である。そのために、若松監督や旧友の佐々木守さんらが講談社と話をつけたという。私の方がOKなら、すぐ金を持って来れる準備を整えているとのことだった。

リビアとの交渉にもアラブ赤軍の日本人間の連絡用アパート確保にも、PFLPの活動以外には独自の財源が必要だった。カンパにも限界がある。この企画を聞いて、PFLPの許可を得て、OKをWさんに伝えた。

PFLPからは、本を出すのはいいが、バグダッドなどの場所とか非公然のことや名前など気をつけてほしいと言われただけだった。了解してそのプロジェクトのための準備と活動を、Wさんにすぐベイルートに戻ってやってもらうことにした。

私の方は、バグダッドでの技術者会議に多忙だった。多分はじめて中東を訪れたWさんも手探りだったろう。Wさんが持ち込んできた出版企画の仕事を彼に依頼した。彼はPFLPや日本人ボランティアと準備するのは大変だったかもしれないが、こちらも多忙で、ベイルートの仲間任せに任せた。

ちょうどその頃、リビアに行っていた仲間がバグダッドに戻ってきた。ドバイ闘争の日本人戦士のCに会えたとし、元気だったという。Cは日本人の自分だけの釈放は望まないと言っていたらしい。Cはそういう人だ。いつも他の仲間を優先し、自分は最後に楽をすればよいと考えている。そして、いつでも苦難と犠牲をいとわない。その人柄は、人々に好かれる由縁である。当初はドバイ闘争の部隊に対して、リビアはエジプトのさしがねかと厳しい尋問もあったが、赤軍やPFLPと分かっただけからは、何の取調べもないし、かなり自由だという。

リビアの建物の個室で、Cと日本人同士が話をしていた時、机を揺らした拍子に盗聴器がぼとりと落ちた。とEさんと技術者も大いに笑いながら話していた。「何だこれは！」と抗議すると、「イヤー失礼。これは君たち用ではない。前からあったものだ」と、しきりに弁解したという。

そういうことはあったが、リビアは友好的に受け入れてくれたと語っていた。そしてすぐ、私も行って話しをしたほうが良いと言う。とにかく、革命評議会メンバーか、カダフィ大佐に会って話をしよう。同行した技術者が有能だったせいで、技術共同も進みそうだと言う。こちらが実力もないのに、仲間の釈放問題に絡めて少し「はったり」を言い過ぎたかもしれないと反省していた。とにかく10月か11月に私も行くことにした。様子もわかったので、PFLPも私のリビア行きを次回は許可するだろう。もう、私たちとリビアの友好関係はできつつあるので、「危ない、危ない」と止めるわけにも行かないはずだった。ビジネスと技術者との話し合いや友人のバグダッド入りを待っているところに、勇ましい音楽と共に、10月戦争の勝利的開始が突如告げられた。(この章つづく)



六月の歌

重信 房子

藤色の胡蝶蘭とカスミ草リッダ連帯友より届く

月を見に真夜の獄窓だいだいの三日月がゆく祈りを連れて

少しだけしびれる足をひきずりつ癌患者の君「やあ！」と面会

向き合って本当のこと記したら君の扉は開くだろうか

幼き日螢を見つけ全力で駆けて父へと伝えし夏の日

アジサイの濡れた一枝にぎりしめ樺美智子を弔いし若き日

獄の辺で格子に手のひらいっぱい伸ばして受ける梅雨の水滴

茅かやの中にぐんぐん伸びる一本の異端は誇る月見草らし

足下に病葉一つ風に乗り病舎の友をふいに思えり

後記

7月16日に、7月15日付の最高裁の判決が被告人重信さんに通知されました。予測はしていたものの、突然に、しかもなんら誠実な検討がされたとも言えない、味気のないおざなりの決定に、怒りを通り越して呆れ果てています。それで、急遽「最高裁判決を受けて」を軸に編集し直しました。やむを得ず、予告しましたように「アラブ物語」の今の章を締めくくれませんでした。お許しください。

この裁判所の姿勢から言って、異議申し立てが受け入れられる可能性はきわめて低いと言わざるを得ないのですが、突破できることを信じたいです。 Y

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル4階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

銀行口座 三井住友銀行 赤羽支店 226-3687269 オリーブの樹

www.geocities.jp/setfreemarian/index.html

頒布価格 500円

「正誤」表

第100号

- ①4P15行目 論告に放って→論告に倣って
- ②4P15行～16行目
「それらは、かつて裁判所が一度も使用してこなかった不定義な『テロ』なる用語を論告に倣って判決文に用いたことにも表れています」
→4P下から13行目の後に(移動)
- ③5P14行目 公式な裁き→公正な裁き
- ④8P右下から19行目 ~が着て→が来て
- ⑤10P左下から6行目 内ゲバ→内内ゲバ
- ⑥11P(6/7)左終わりから4行目 入国許否→入国拒否
- ⑦12P右下から5行目 同盟あった→同盟者であった
- ⑧15P右上から16行目 最小不幸社会→最小不孝社会
- ⑨15P右下から14行目 菅首相→菅首相
- ⑩16P左下から16行目 菅・民主党政権→菅・民主党
- ⑪17P左上から10行目 自転写→自転車
- ⑫19P左下から15行目 送ってき来て→送って来て